

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ソーシャルの用語 seme についての考察

著者	近藤 愛紀
雑誌名	研究論集
巻	97
ページ	219-224
発行年	2013-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00006090/

ソシユールの用語 *sème* についての考察

近 藤 愛 紀

要 旨

記号の一般理論に関するソシユールの草稿の一つに、整理番号でN15というのがある。エングラーとブーケによる校訂版の通し番号では、草稿は、3306項から3324項まで、各々の項に属する下位区分を含めて87篇からなる。ソシユールは *sème* という用語を用い、記号の概念を追究している。本論では、ソシユールの記号理論の中心となる *sème* という用語について、また *sème* とともに導入されたいくつかの用語について考察を加えた。

キーワード： *sème* (セーム)、記号の一般理論、ソシユールの草稿

はじめに

記号の一般理論に関するソシユールの草稿の中の一つに、整理番号でN15というのがある。エングラーとブーケによる校訂版の通し番号では、草稿は、3306項から3324項まで、各々の項に属する下位区分を含めて87篇からなる¹⁾。そこでは、記号についてのきわめて独創的な考察がなされている。各項のすべての冒頭部分は *Item* で始まる。3308項では、ブレアルの『意味論』(1897年)の中で扱われた「言葉の省略という現象」についてふれているので、この草稿は1897年頃にかかれたと推定される。本論では、ソシユールの記号理論を支える *sème*(セーム)という用語について考察を加えたい。

1. ソシユールの *sème* の概念

3323.5に、次のような一節がある。「次の事実に気づくことが何よりもたいせつである。すなわち、私たちが、音の細部とかニュアンスといったもの、例えば二つの語のわずかに異なる発音に注意するときはいつも、[その微妙な差異を明らかにするために]、自問することを、すなわち、対応する発音を呼びよせるように、語がもつ観念を明確にすることを唯一の手段とする。だから、セーム [記号] の中では、音はその他の部分と切り離すことができないし、音はセーム全体が捉えられる限りにおいてしか、したがって意味を伴ってしか把握されない。*chien* (犬)

という語について言えば、それをどう発音するのかを知りたい時、私はまず犬について考え始める²⁾」。

セームは原語では sème である。現在の言語学では、「意味素」のことであるが、ここでのソシュールの用語は彼独自のものであり、記号を指す。普通の用語では signe である。ソシュールのセームについての説明は3310.11と3310.12に見出される。

「セームは、第一に慣用記号である。第二に（同じく慣用的な）体系の一部をなす記号である。（...）。だから次のように言うこともできよう。セームは、言語（音声的であろうとなかろうと）を構成する諸記号（signes）のものと認められるであろういろいろな性質を帯びている記号（signe）である。（...）。なかんずく、セームという語は、記号の音声的側面と観念的側面のどちらの優位性も、また初めからこの二つの側面を分離してしまうことも退ける、あるいは退けようとするだろう。セームは記号の全体、[身体と精神が分けることのできないように]いわば一種の人格のなかで結ばれた記号と意義を表すのである³⁾」。そして、ソシュールの考えるセームは孤立したものではなく、諸々のセームから成り立つ関係的な存在である。「セームはただ音声性と意義によってのみ存在するのではなく、他の諸セームとの相関関係によって存在する⁴⁾」。

さらにソシュールの言うセームの守備範囲は、言語記号のみならず、他の種類の記号にまで及んでいる。

まず言語記号については、その「単一空間性」が強調される。「言語セームは、単一空間的セームの一般的なグループに属する。聴覚的な伝達にもとづくセームは、どれもみな必ずここに入る。しかし、重要なのは、聴覚的伝達ではなく、単一空間性なのである⁵⁾」。

ここで単一空間性と呼ばれているのは、換言すれば一次元の性質をもつということであり、普通の用語では「線状性」のことであろう。ソシュールは3318.1で、「努めて、言語記号の単一空間性と言うようにしなければならない。それがセームの一般的性格でないことを感じさせるために」と述べて、逆にそれ以外の空間性を持つセームの存在を浮き彫りにすることで、「多数空間性（多層空間性）」のセームまで考察を進めて行く。

「セームとは何かをもっとよく捉えるために、人はおそらく多数（多層）空間的なセームの実例を求めるだろう。（...）私は寓意画を、あるいは描かれている事物が、その意味性を表現している限りにおいていかなる絵画をも、セームと呼ぶことができよう。こうした絵はその画面が、左側から始まり右側で終わるということとはできないであろう⁶⁾」。

絵画は多数（多層）空間的セームの代表例であり、書かれたもの（文章）のように、左から右へ進むような単一空間的（線状的）なものではない。ソシュールは草稿の別の箇所（3318.4）で、視覚的なセームの「非・単一空間性」という言い方をしている。以上見たように、ソシュールは「単一空間性」と「多数（多層）空間性」を軸にして、セームの持つ特徴を探究して行く

のである。

2. セームに伴うその他の用語

ソシユールはセームとともに、一連の用語を導入する。特定共時的な体系内に共存する各辞項は、parasème（パラセーム）と名づけられ、各セームから抽象された表現面（セームの音声面）を aposème（アポセーム）、各セームの形態としての表現面を sôme（ソーム）、その相対面である概念面を contre-sôme（コントルソーム）ないし antisôme（アンチソーム）と呼んでいる。

まずアポセームについては、用い方に若干の揺れがあることが分かる。「どんなアポセームも、ある特定の時に捉えられる。言語内でそう捉えられるからこそ、それはアポセームの名に値するのであり、ただ単に音の連続ではないのである。とりわけアポセームは、前部と後部で画定される。（逆に—bd—のような音型をアポセームと呼んではならない。ただ、ある瞬間にセームの身体だった音型だけをそう呼べる。）⁷⁾」。このアポセームは signifiant（シニフィアン）に相当するだろう。だが次のアポセームについての説明はその物理音的性質に注目した記述になっている。「話し手は自分が発するアポセームには何の意識も持ちはしない。一方純粹觀念についても同じである。彼はセームだけを意識する。そのことが、アポセームの完全に機械的な変化を何世紀にも亘って、保証するのである⁸⁾」。セームから取り出されたアポセームは話し手の意識にはのぼらない。話し手が意識するのは意味を担った音だけである。「心理的な現実（実在）がいろいろあり、また音声的な現実（実在）がいろいろあるとしても、二つの系列を切り離せばそのいずれもが、最もささいな言語事象さえ生み出さないであろう。言語事象が存在するためには、二つの系列は一体でなくてはならない⁹⁾」とソシユールは力説している。1894年に書かれたと推定される「形態論」の草稿でもそのことは明確に述べられている。「言語 [の話し手] は記号としてしか、音を意識しない。(…)。現実のもの、それは話し手たちが何らかの度合いで意識するもの (ce dont les sujets parlants ont conscience à un degré quelconque) である。(…)。ところで、あらゆる言語状態において話し手は、形態論的単位、すなわち表意単位を意識する¹⁰⁾」。

sôme と contre-sôme は sème を構成する二項であり、それぞれソシユールがのちに『講義』で用いることになる術語では signifiant と signifié に相当するであろう。contre-sôme は antisôme と呼ばれ、意義と同様に使われる場合は特に体系内の相関関係を念頭において parasôme と呼ばれる。「意義と呼ばれるものは、私たちが parasôme と呼ぶものであるが、sôme と違って、これをそれ自体で探究、観察の対象になるように抽出することは決してできない。誤解のないようにはっきりさせておこう。ある程度は、意義も探究や観察の対象になり

うる。だが、それはたえずセームへと立ち戻ることによってである。すなわち、そのパラソームを一種物質的なものに、つまりソームに結び付ける多種多様なセームへと立ち戻ることによってである¹¹⁾」。意義はセームから分離されると純粹觀念と同等のものになってしまうので、言語学的存在ではなくなると、ソシユールは注意を促している。

おわりに

以上のソシユールの用語は、彼の言語理論において一時期しか用いられなかったが、その試みは、1894年1月4日付のメイエ宛書簡で述べていた「用語法の改革」の実践例であると言えよう。ソシユールがこの書簡の中で次のように述べていたことを確認しておきたい。「現在ひとびとが用いている用語法の愚かしさ、それを改革する必要」があり、「一冊の書物の中で、(...) 言語学においては、私が何らかの意味を認められるような用語がただの一つも使われていないのはなぜかを説明することになりましょう¹²⁾」。

1897年頃に書かれたと推定されるこの草稿は、ソシユールの立ち向かっていた対象が何であるかを、私たちに垣間見させてくれる。1章と2章で見えてきたようにソシユールが常に念頭に置いていたのは「記号の根本的な二重性」である。そのために、*sème* をはじめとして一連の用語を考案した。「記号の二重性」に関しては講義においても言及される。1911年5月19日におこなった一般言語学講義において、ソシユールは、「記号体系としての言語 (*La langue comme système de signes*)」という章題を示して、言語記号の二つの側面を表すために「聴覚イメージ」と「概念」に替えて、「*signifiant* (意味するもの)」と「*signifié* (意味されるもの)」という用語をはじめて導入する。そして *signifiant* と *signifié* を用いる利点が、「言語記号の音声面と意味面の結びつき」を思い起こさせる点にあることを指摘した上で、これらの用語についても「完全に満足のいく呼称とは言えない」として、その理由を述べる。「なぜなら、この二つが一体化したものを『*signe* (記号)』と呼ぶ限り曖昧さが残るからです。*signe* はしばしば *signifiant* だけを指してしまうからです¹³⁾」。

ソシユールが一時期、*signe* よりも *sème* という用語を好んでいたのは「記号の二重性」をよりよく表現できると考えたためであろう。ソシユールが *sème* という用語を使わなくなり、*signe* を使わざるを得なかった理由は、彼自身が述べたものが見出されないので推測するほかないが、以下のことが考えられる。*signe* という呼称が慣用として自然言語のなかに定着してしまっている以上、言語学者といえども簡単には新しい用語に替えることはできない。なぜなら言語は言語学の対象にとどまらず、言語学者をも包摂し、制約するものだからである。言語学で用いられるメタ言語も、それが言語である限り、言語の伝承性、連続性という法則を免れることは不可能である。言語学の用いるメタ言語による言説は、生きた言語を参照することに

よってはじめに理解可能となるのであり、私たちの日頃親しんでいる言語に組み込まれることではじめて十全に理解される。ソシユールはそう考えて、日常語としてはなじみのない用語を使用しなくなったのではないかと私には思われる。

註

- 1) Ferdinand de Saussure, *Ecrits de linguistique générale*, texte établi et édité par Simon Bouquet et Rudolf Engler, Paris: Gallimard, 2002, pp.101-119.
ソシユールの草稿は同書から引用し、再出より *ELG* と略す。原文を註に示す。
- 2) *ELG*, p.118. «Capital de noter que toutes les fois que nous sommes rendus attentifs à un détail, une nuance de son, par exemple à la prononciation légèrement différente de deux mots, nous avons pour unique moyen de nous interroger nous-même, de bien préciser l'idée du mot, comme appelant la prononciation correspondante. Tant il est vrai que dans le sème le son n'est pas séparable du reste et que nous n'avons possession du son que dans la mesure où nous prenons tout le sème, donc avec la signification. Pour le mot *chien*, je commence par penser à un chien, si je veux savoir comment je prononce.»
訳文の [] 内の語句は文意を分かりやすくするために、引用者が補ったものである。
- 3) *ELG*, pp.104-105. «Sème = 1° signe conventionnel, 2° signe faisaint partie d'un système (également conventionnel), [...]. / On peut dire ainsi : Sème = signes participant aux différents caractères qui seront reconnus être ceux des signes qui composent la langue (vocale ou autre). / Entre autre, le mot de sème écarte ou voudrait écarter, toute prépondérance et toute séparation initiale entre le côté vocal et le côté idéologique du signe. Il représente le tout du signe, c'est-à-dire signe et signification unis en une sorte de personnalité.»
訳文の [] 内の語句は文意を分かりやすくするために、引用者が補ったものである。
- 4) *ELG*, p.105. «Le sème n'existe pas seulement par phonisme et signification, mais par corrélation avec d'autres sèmes.»
- 5) *ELG*, p.112. «Le sème linguistique fait partie de la famille générale des sèmes uni-spatiaux, dont fait partie nécessairement tout sème basé sur la transmission acoustique. Mais ce n'est pas la transmission acoustique qui est importante, c'est l'unispatialité.»
- 6) *ELG*, p.112. «On demandera peut-être un exemple de sème multispatial afin d'avoir un moyen de mieux saisir la notion de sème. [...], je puis appeler de ce nom un tableau allégorique – ou même une peinture quelconque dans la mesure où les objets représentés touchent à la signification des choses. Il est impossible de dire que ce tableau commence par la gauche et finit par la droite.»
- 7) *ELG*, p.107. «Tout aposème est pris à un moment donné. C'est le fait d'être pris ainsi dans la

langue qui fait qu'il mérite un nom comme aposème et n'est pas simplement une suite phonique. Notamment il est délimité en avant et en arrière. / (Il ne faut pas appeler réciproquement aposème une formule phonique quelconque comme *-bd-*, mais seulement les formules phoniques qui ont un certain moment été le corps d'un sème.) >>

- 8) *ELG*, p.109. «Les sujets parlants n'ont aucune conscience des aposèmes qu'ils prononcent, pas plus que de l'idée pure d'autre part. Ils n'ont conscience que du sème. C'est là ce qui assure la transformation parfaitement mécanique de l'aposème à travers les siècles.»
- 9) *ELG*, p.103. «S'il y a des réalités psychologiques, et s'il y a des réalités phonologiques, aucune des deux séries séparées ne serait capable de donner un instant naissance au moindre fait linguistique.
/ Pour qu'il y ait fait linguistique, il faut l'union des deux séries.»
- 10) *ELG*, pp.182-184. «La langue n'a conscience du son que comme signe. [...]. Ce qui est réel, c'est ce dont les sujets parlants ont conscience à un degré quelconque [...]. Or, dans tout état de langue, les sujets parlants ont conscience d'unités morphologiques, c'est-à-dire d'unités significatives.»
訳文の下線は引用者によるものである。
- 11) *ELG*, p.115. «Ce qu'on appelle la signification est ce que nous appelons le parasème et, à la différence du sème, ne peut jamais être dégagée de manière à devenir pour elle-même un objet de recherche ou d'observation. Entendons-nous bien : elle peut devenir dans une certaine mesure un tel objet de recherche et d'observation à la condition qu'on en revienne sans cesse au sème, aux différents sèmes qui unissent ce parasème à quelque chose de matériel, c'est-à-dire au sème, mais ceci ne constitue rien de semblable à l'étude des sèmes, que nous avons reconnue indépendante.»
- 12) F. de Saussure, «Lettres de Ferdinand de Saussure à Antoine Meillet», publiées par Emile Benveniste, *Cahiers Ferdinand de Saussure* 21, Genève: Droz, 1964, p.95.
- 13) ソシュールの一般言語学講義については次の文献に拠る。
Robert Godel, *Les Sources manuscrites du Cours de linguistique générale de F. de Saussure*, Genève: Droz, 1957, p.85, pp.192-193.

(こんどう・まなき 国際言語学部教授)